慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二〇一五年度修士論文題目；二〇一五年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2016
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.86, No.3 (2016. 10) ,p.138(334)- 147(343)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20161000-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

視座の将来的な拡張可能性であり、審査員は一致して本論文が博士（史学）の学位に十分に値する成果であると評価する。

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学文学部教授　山口　徹
副査　慶應義塾大学名誉教授　鈴木正崇
副査　お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系教授　棚橋　訓
副査　慶應義塾大学文学部教授　安藤広道

二〇一五年度修士論文題目

〔日本史学専攻〕

維新政権と旧大名伊達宗城

植田　竜一

慶応三年十二月の王政復古から明治四年の廃藩置県までの政権、いわゆる維新政権を構成したのは、藩士と公卿、そして旧大名層であり、少なくとも一人以上の旧大名が常に維新政権に在籍していた。だが研究史上では、維新政権期以後に政府の中心となっていく藩士らの動向に注目が集まるあまり、政権内の旧大名の考察は看過されてきた。そのため、維新政権研究で言及されている政権と政権内の旧大名との関係は、政権内の藩士らが諸改革を断行することで、無能で守旧的だが「形式的」に要職に就いていた旧大名を、「政府の中枢から排除」し「旧勢力を後退させ」、「朝廷権力の確立」と「封建領主階級の解体」を達成したとされている。つまり、政府内の旧大名には、中央集権をすすめる過程で「排除」されるべき存在という評価のみが与えられてきた。政権を構成していたはずの旧大名の存在を無視したまま、維新政権や明治維新の研究が蓄積されている状況であった。

そこで本稿では、議定や外国官知事、民部大蔵卿、欽差全権大臣などに就いた前宇和島藩主伊達宗城の維新政権内での活動と彼に求められた役割について考察した。

第一章では、自らすすんで政権に参加したわけではなく、藩士や公卿らに要請されて渋々出仕した様子を明らかにした。第二章と第三章では、外国官知事時代の伊達の動向と免職時の状況を検討し、高齢・体調問題、家や藩の問題など対応せざるをえず、外国官知事として勤務することに限界を自覚している様子、「大波爛」な政府に不満を覚えて自ら下野を希望していたことなどを解明した。また、民部大蔵卿と日清修好条規締結交渉にあたる欽差全権大臣に在任していた時の伊達の動向を分析した第三章と第四章では、これらの要職に単なる形式的な理由で任命されたわけではなく、当職で彼にしか果しえない機能があったために政権在籍を求められたことを分析した。第五章では、大蔵卿免職という二度目の下野の理由について検討した。そこでは、政権を取り巻く状況の変化により、伊達が果してきた役割が機能しなくなっていたことや、対清交渉の長期化などの不測の事態により、大蔵卿免職となったことを解明した。

本稿の意義は、予定調和的かつ計画的に政権から旧大名は「排除」されたという評価や、藩士と旧大名が政府内での主導権やポスト争いをした等の見方が妥当でないことを分析したことである。そもそも政権出仕を望んでおらず、さらに政権に見切りをつけていた伊達ら旧大名たちが、政府のポストに固執する理由がない。むしろ、旧大名の政権出仕を希求したのは政府内の藩士や公卿たちであった。維新政権期に旧大名が政権から次々と下野していくのは、自ら政権を辞したいという旧大名の意思によるものであったのである。

明治期における地方警察
―神奈川県高座郡の事例を中心に―

片上　和正

本稿は、明治期における地方警察について、その活動実態を明らかにすることを目的としている。警察史の研究には、以下のような問題点があると言える。一点目は、視点が警察制度の変遷に偏っており、警察官の活動実態が明らかになっていない点である。これは、警察史料の「秘密性」および「閉鎖性」が影響しているものと考える。二点目は、東京をはじめとする都市部の警察の考察に偏っており、地域における警察官のあり方が十分に議論されていない点である。そして三点目は、警察の威圧的な側面のみが注目されている点である。以上から、本稿では主に明治期に神奈川県高座郡で活動をしていた巡査の日記および警察関係雑誌・新聞などを用い、明治期の地方警察について考察を行った。

第一章では、近代日本における警察制度の形成を概観し、続く第二章では、地方警察の整備について、特に駐在所制度に着目し、外国人顧問ヘーンの復命書を用い検討した。

第三章では、雑誌・新聞を用い、警察が一般民衆にどのように認識されていたのかについて明らかにした。先行研究では、自由民権家の意見が中心に検討されており、警察の威圧的態度に対する反発が明らかになっていた。しかし本研究により、警察官が職務に「忠勇」に取り組んでいたことや、人々から依頼され一家内の問題までも説諭という形で解決をしていたことに対し、人々が感謝状を送るなどしていたことが明らかとなった。

第四章では、主に明治二十年代から明治四十年代にかけて、神奈川県高座郡において活動をしていた巡査の残した日記を用い、地方における巡査の活動について明らかにした。巡査・石上憲定が残した日記の内容を、犯罪の処理、衛生警察行為、各種規制・検査行為、政治活動への対応、説諭という項目を設けて分析を行い、地方における巡査の活動実態を明らかにすることができた。特に、説諭という行動に着目し、駐在所で周囲の人々と交流をしながら、法を杓子定規に適用するのではなく、時には私事に関する問題についても、柔軟に解決する巡査の姿を明らかにすることができた。

第五章では、説諭について考察をした。警察官の間で説諭という行為は、重大な犯罪に発展する可能性がある事柄について、それ以上の発展を押さえようとするため、また軽微な犯罪を処理するために用いられるが、一家内の私事には及ぶべきものではないと考えられていた。さらに行政警察規則では、警察官が「職外ノ事」を為すことを認めておらず、警察上層部もそうした認識を持っていた。しかし、これまで述べてきたように、現場の警察官たちは、軽微な犯罪については、その数の多さから、逐一正式な裁判手続きに乗せるようなことはせず、説諭で済ませていた。さらに、「職外ノ事」である家庭内の私事にまで説諭をしていたのである。それらは、警察制度を実際に運用していくために、現場レベルで必要なことであったと考えられるのである。以上のように、警察官の活動実態を明らかにしたことが、本稿の意義である。

日露戦争期軍役夫の研究
―募集請負制度の特質と変遷及び募集請負人の諸類型―

須藤　遼

本稿では日露戦争期軍役夫を多角的に分析した。その際には募集請負を陸軍、募集請負人、軍役夫という固有の歴史的展開をなす諸アクターが交差したときに生じるものとして把握しようと努めた。対象とした日露戦争期は過渡期的特徴を有する時期であり近代における軍役夫を検討する上で重要な足がかりとなる。

第一章ではまず日露戦争期軍役夫を規則と実態の両面から技能と出自に着目して把握した。その上で先行研究の定義の揺らぎや日露戦争期「軍夫」の存在否定を検討した。さらに先行研究の定義する「軍夫」が日露戦争期軍役夫のなかに存在したことを示し先行研究との接続を図った。

第二章ではまず陸軍による募集計画や募集方法における試行錯誤を日清戦争期の経験を踏まえ検討した。そうした陸軍の動向には収まりきらない社会における募集請負の発生や募集上の問題も考察した。さらに戦時軍役夫傭役規則を分析し陸軍の上下関係に組み込みつつ責任を募集請負人に負わせるという多面的な制度設計を明らかにした。この規則は単純なもので複雑な内実と出自を有する軍役夫を完全に規定することはできないが、単純だからこそ陸軍が任意に解釈しうる可能性もあった。しかし一部の使役部隊や募集請負人は自らの利害に基づき軍役夫の多様な振舞いを選択的に動員し制度変化を促した。こうした制度変化は陸軍の軍役夫認識が深化していくことに繋がった。

第三章では大規模・一括・単純肉体労働者中心を特徴とする福岡組と小規模・随時・技能者中心を特徴とする橋本忠次郎という募集請負人を検討した。福岡組からは募集広告における競争、軍役夫の移動、労働状況、陸軍における軍役夫認識の多様性が検出された。橋本忠次郎からは実業家としての成長とそれに伴う移動が募集請負を特徴付けることが分かった。日清戦争期と日露戦争期では募集請負人と制度の両者が変化しており、日清戦争期の記憶から募集請負願をなすも実際は予想とは異なるものとなった。

終章では軍役夫の振舞いは諸アクターの関係性のなかで選択的に動員されるものであること、そうした動員された軍役夫の振舞いによって陸軍の認識が深化していくこと、募集請負人の固有の在り方が募集請負を特徴付けること、軍役夫の制度的な多面性が周縁的存在である軍役夫を上下関係で認識するという混同を生むことを確認した。さらに募集請負を諸アクターの多様な振舞いを踏まえて把握するためには、募集請負人の視点から諸アクターを再構成した募集請負願というメディアと営みが重要であることを指摘した

戦時期の「第三帝国」理念と「国体」論の邂逅
―ナチ宣伝部員デュルクハイムの日本学研究を中心に―

山本　晶子

「枢軸」形成に伴い文化交流が緊密化した戦時下の日独において、国民の精神的動員のために喧伝された両国の民族的ナショナル・アイデンティティは、「他者」との接触（文化交流）の中でどのように立ち現れ、その形成や展開に学問はいかなる機能を果たしたのだろうか。本稿では政府当局の組織的動向を後景に置き、国策協力した学者の「主体的」動向に着目した。そうすることにより、戦時体制への国民の精神的動員に学問がいかに寄与したかというマクロな視点、国家と個人の緊張関係や国家理性とは乖離して展開する個人的ネットワークがいかに機能したかというミクロな視点、双方からのアプローチを試みている。以上の研究主題及び方法を踏まえ、本稿は二つの段階を経て論を進めた。

第一に、戦時下の日独文化交換事業を舞台とする学者の活動

実態の検証（第一章）。一九三八年の文化協定締結をきっかけに設置された日独文化連絡協議会は、当初官民一体型で民間の学者も参与していたが、協議会が外務省文化事業部から内閣情報局に移管されると、諸事業は徐々に戦争遂行目的に収斂されていった。しかし情報局移管（一九四〇年十二月）までのおよそ半年による諸交換事業案挫折（一九四一年七月）までのおよそ半年間には、学術研究の自主性を担保する道筋も模索された。その事例として、少壮学者交換事業案をめぐる協議が挙げられる。臨時委員のデュルクハイム教授らが原案を作成した同案は、若手研究者が文化工作に忙殺されず専門の「研究ト指導」のみに専念できるよう考慮しており、一九四一年に情報局が活動を開始すると、逆に学者たちは、「時局向」でない若手研究者を優先的に選出するよう要請した。結局独ソ戦開戦により同案は挫折するが、苛烈な文化統制下、学術研究の自主性を学者らが模索した一事例として、同案をめぐる協議を位置付けることができる。

第二に、戦時期の日独文化交流で重要な役回りをしたデュルクハイムについて、個人的ネットワークや思想的系譜を踏まえて言説分析を行い（第二章・第三章）、日本国内（特に日本主義学生ら）のデュルクハイムに対する反応から、日独が目指した「近代の超克」の学問的な可能性と挫折について考察した（第四章）。「混血ユダヤ人」ながら学者としてのキャリアを活かしナチ党幹部からの信頼を獲得したデュルクハイムは、日本で仏教学者らとのネットワークを築き、宣伝諜報部員としての地位と日本学研究者としての地位を確立した。デュルクハイムの提唱した超民族的な相互理解を可能にする「民族的悟り」（völkisch satori）概念は、ワイマール共和国時代以来ドイツ神秘主義と東洋思想を架橋する普遍的真実を探求してきた彼独自の学問的関心に根差していたが、同時に全体主義的なドイツ国民の精神的動員に資することを目指しており、国策と学問の交錯するところで生成された概念だった。凡ゆる民族や原理が代入可能な「超民族的」なこの概念は、日独両国で概ね受容に成功した。特にデュルクハイムと原理主義的な日本主義者たちは、双方ともヴント哲学に依拠し、あるがままの現実の直接体験と民族全体意志の個人意志に対する優位性を学術的観点から指摘しており、学問的共通項に立脚した「超民族的」な相互理解が可能と思われた。だが両者は学問的基盤を共有しながらも、内向的に閉鎖された、皮肉にも近代的に構築された民族や国家のロジックに囚われ、相互理解へ向かわなかった。近代を超克し新秩序を構築しようとした日独の「国体」論と「第三帝国」理念は、融合も衝突もせず、戦時期の動態的な情勢に応じ思いがけず邂逅しすれ違った。「近代の超克」を目指した戦時期の学問的営為の限界として、デュルクハイムと原理的日本主義者の邂逅を捉えることができる。

二〇一五年度卒業論文題目

〔日本史学専攻〕

白村江の戦いに至るまでの倭外交の変遷について　蓮本　龍
古代日本の女帝の即位とその背景
—藤原不比等・県犬養橘三千代夫妻の台頭—　広瀬　朝美
古代の人々の夜と霊鬼
—今昔物語集巻二十七より—　山羽　洸貴
藤原清衡と京都のネットワーク—後三年合戦後初期段階
（寛治～康和）での可能性の提示—　内本利恵子
中世武蔵国の道について　小山　智晴
法身院御成から見た室町殿と有力諸大名の関係性に関する
一考察　浦野　修平
慶應義塾大学文学部古文書室所蔵『宝鏡寺文書』に関する
一考察　増本　友理
近江浅井氏による在地支配—年貢収取を中心に—　金子　高大
キリシタンの聖母信仰—受容から変質まで—　吉原　佳織
日本における男色と近世期の特質　松村　詠美
御殿設立が中原街道の発展に与えた影響　木村　宇宏
三井高利の商思想について　竹内　紀夫
宇都宮藩戸田家を巡る金銭取引
—大伝馬町名主馬込家の金融を中心に—　笹生　健太
評判される戯作界—評判記と外題鑑を中心に—　上村　美波
後期水戸学の教育
—藤田幽谷から受け継がれる教えと魂—　池田　悠紀
天璋院篤姫と江戸開城　武田　瑠璃
明治期日本における自殺　須江早紀子
明治期京都における花街・遊郭の位置づけ
—地域の活性化との関わりから—　春川里紗子
台湾鉄道事業の展開と構造　森田　隼
大正期帝国議会請願における「民情」と「言路」
—埼玉県域呈出の貴衆両院請願を事例として—　石坂　桜
元老による「憲政の常道」システムの導入と挫折
—協力内閣運動の影響—　藤木　七海
『私の鶯』からみる満州教化政策　西川　和孝
真珠湾攻撃—第二次攻撃について—　土屋　雄俊
戦時期における音楽の社会化
—厚生音楽運動をてがかりに—　宮崎　麻衣
近代新聞販売業の変遷
—発行社と販売店の関係を中心に—　赤間　寛紀

〔東洋史学専攻〕

戦間期における英国のパレスチナ統治（一九二二—一九三九）
—石油戦略の影響を中心に—　岩田　賢
パキスタン軍人ズィヤーウル・ハックの人物像　佐々木智啓
ウマイヤ朝の変化と継続性　赤池　俊希
シリア：ハーフェズ・アサド大統領の対外政策

―一九八〇年代前半を中心に―　海野　雄矢
現代フランスにおける内なるイスラーム
―ライシテ概念とムスリム移民との間で―　遠藤　慎
テュルク系諸民族に伝わる英雄叙事詩とその価値観　小島　茜
ムスタファ・ケマルの世俗主義政策　白石麻衣子
オスマン帝国における「新方式」教育
―セリム・サービトの『教授指南』を中心に―　豊田　悠
一九世紀前半のブハラ市場と国際交易　中道　有紀
アユタヤ朝におけるイスラーム共同体の動向―一七世紀から一八世紀にかけての「盛衰」に関する考察―　長井　翔平
一一・一二世紀シチリアの商業の実態
―ゲニーザ文書から見るその重要性―　長岡　夏実
イスラーム型証券の流動性問題についての考察　波多野　遷
一七世紀バルカン都市の繁栄と中央行政との紐帯
―『旅行記』から見るフロンティア都市の実態―　藤田　小穂
偉人と国家
―シンガポールの国家形成に観る偉人の影響―　伊藤光太郎
文明戯の成立による新たな観客たち　竹崎奈津子
張作霖と日本―東三省統一から中央進出へ―　林　美穂
戊戌変法運動に見る中国
―康有為と反変法派の対立を中心に―　吉武さくら
中印国境紛争の源流―マクマホン・ラインを軸に―　和久井美奈

［西洋史学専攻］

航海者クリストファー・コロンブスの信仰心　五十棲粧子
カール五世とフランソワ一世
―二人の君主の関係から見る「イタリア戦争」―　荒谷　光咲
西洋におけるキリスト教の世俗化
―百科全書派と聖俗革命―　飯塚　拓也
ベルギー王レオポルド二世のコンゴ支配―国王による植民地私的支配を生み出したベルギーの特殊性―　小嶋　祐人
イタリア統一運動におけるマッツィーニの理想と挫折　石井　祐太
フランス第二帝政期のパリの都市改造とその社会的影響　北野　芳英
アメリカにおける女性の権利意識の覚醒
―公的領域と私的領域の狭間で揺れた女性たち―　植松　優実
ヴィクトリア女王におけるジェンダー・ジレンマ
―公的領域と私的領域の狭間に立つ女性―　益田　里穂
北アイルランド問題について
―アルスターはなぜ分離されてしまったのか―　田代　早紀
シンガポールの経済発展
―統合と抑圧と高能率国家―　大島　楓
近現代スペインにおけるナショナリズムの変容
―カタルーニャから視る地域と国家―　鈴木　彩佳
南アフリカにおけるアパルトヘイト抵抗運動
―ＵＤＦが果たした役割について―　鳥井里沙子
ＧＨＱによる日本教育改革の試みと挫折

—PTAの導入をめぐって—　波多野祐樹
スケープゴーティングの視点から見る魔女狩りの発生条件　江口　圭
ハプスブルク帝国と民族問題
スペイン内戦とその報道　南　早裕美
魔女狩りの犠牲者に関する一考察　坪田早由里
—魔女はなぜ女性なのか—　山崎結花子
リソルジメントにおけるイタリア統一構想の比較について　桑原　想
世界恐慌と大統領内閣
—ヒトラー政権誕生への影響—　小島　光介
ウクライナにおけるユダヤ人の殺害
—独ソ戦とウクライナの事情—　池田　力以
一六、一七世紀周辺のイギリスにおける魔女狩りの特異性　恩田　豪
帝国主義時代と現在の技術移転についての比較研究
—インドの鉄道を例に—　川野　真優
一九三〇年代後半のイギリス外交政策に関する考察
—ミュンヘン会談前後の英独関係を例に—　小嶋　駿介
ナチス政権下における福音主義教会の抵抗　高関ひかり
民族的均質性の形成
—ポーランド一九四四～一九五〇年—　中村　亮
高等教育機関におけるユダヤ人割当制とアメリカ社会について　西尾　和晃
ナチ支配下のハンブルクにおける反セム主義—一九三八年以前の「アーリア化」をめぐる状況—　宮田沙矢子
スパルタの内政改革とリュクルゴス伝説
—古典期とヘレニズム期を中心に—　森脇　淳裕
ヴィシー政権による対独協力とその影響ならびに評価　山本　和樹
中世の大学の起源—オックスフォード大学にみる大学の意味とその役割—　青山　五郎
ハイメ一世の自伝での語りとその真偽について　鈴木　健介
激動のルネサンス期ミラノにおけるジャンガレアッツォ・ヴィスコンティの処世　冨嵜　綾乃
フランス革命における女性の政治活動について　井上のぞみ
ジャンヌ・ダルクは異端であったのか
—処刑裁判の宗教的背景と政治的背景について—　岡田　真悠
「ブルターニュの独立を守ろうとした女性」としてのアンヌ・ド・ブルターニュのイメージの妥当性　興松　杏奈
ノルマン朝期のイングランド教会における「叙任権闘争」
—カンタベリー大司教アンセルムスが果たした役割—　河邊　卓也
ルネサンスが生んだ悪徳の一族について　草尾依里子
百年戦争におけるイングランドの目的
—休戦・条約の軌跡から—　渋谷　弥沙
スコットランドにおける魔女狩り　鄭　賢珠
エドワード一世の「模範議会」

―その模範性を探る―　横山　祐一
［民族学考古学専攻］
平成刀剣における「伝統」と「美」
近現代におけるオビシャの歴史的変遷
―多摩川中下流域を中心として―　鈴木　康平
瀬戸内海地域航路の変遷
―戦後の尾道市周辺島嶼部を対象に―　井門　拓真
出土丸木舟の形態と用途について
―千葉県栗山川流域を中心に―　占部　光莉
東日本における古墳出土臼玉の使用法
―遺構内分布状況の分析を中心として―　大始良美里
家形埴輪形式の再分類―関東の資料を対象に―　谷口　聡史
岩橋千塚の築造背景と被葬者について
―古代豪族紀氏と渡来人の関係から―　原　響子
旧日立航空機立川工場変電所の保存に至る背景と現況、今後の利用についての考察　藤井　康成
雑木林への関わりの変化
―トトロの森を対象にして―　森口　大史
関東地方におけるニホンジカにみるサイズの経時的変化
―部位別出現頻度の分析から―　吉田　翔
博物館におけるアイヌ像の変遷
―国立歴史民俗博物館を事例に―　長谷　光
縄文時代の北海道における鰭脚類の利用
―形状の変化とその要因に関する考察―　浦崎　俊樹
移行期青銅器時代のオイルランプついて
鉄器時代パレスチナにおけるケルノスの諸相　高橋茉莉子
初期キリスト教美術におけるキリスト像の変遷
―パントクラトール像成立の経緯―　阿部美奈萠
ロマネスク聖堂の西正面扉口におけるキリスト表現の変化　有吉　亮
古代エジプト新王国時代の船
―「死者の書」の文字と図像を通して―　伊藤雄太郎
第二神殿時代のパレスチナにおけるロクリ墓の変遷
―エルサレムの資料から―　菊池　昌平
パレスチナにおけるマムルーク朝時代の土器の装飾―ブルジュ・ベイティン遺跡C-2地区出土土器を事例に―　長尾　琢磨
ヘブライの神とマツェバー　木下　圭佑
世田谷区庚申塔の現状と問題
―昭和五九年調査報告をたどる―　原田　悠香
明治の合祀政策を生き抜いた神社―埼玉県における中山道周辺の氷川神社を事例に―　村田明佳音
贈られるモノのチカラ―一九六〇～八〇年代のバレンタイン・プレゼントを事例に―　寺尾奈々子
江戸期以降の北前船「船絵馬」と近現代の「船写真額」にみる継承と変化―瀬戸内海と日本海側の寺社に奉納され　添野　友洋
　堀江　紅葉

た事例を中心に―　大塚　亮

文化資源としての「昭和」
―展示される昭和三〇年代のくらし―　北川原　梓

慶應義塾大学所蔵ダガー（短剣）の歴史的位置づけ―アドミラルティ諸島から収集された資料について―　嶺岸かなえ

写真花嫁がハワイにもたらしたもの―戦前の日系移民統計資料に「アロハ」の創出を読み解く―　村井　南

旧石器時代の津軽海峡周辺地域におけるヒトの往来―主に尻労安部洞窟出土台形石器の石材分析から―　市田直一郎